

衣川長秋の紀行文版本の分類について

丸 山 健 一 郎

はじめに

衣川長秋の紀行文『田蓑の日記』及び『やつれ蓑の日記』の伝本については、これまで、本文や板木の異同が報告されていない。調査の結果、それぞれ三種類に分類が可能であると考えられるため、その試案を示す。両者ともに初版本に対して入木改刻による改訂版が存在し、改訂版には後印本が存在する。これにより衣川長秋の紀行文は、従来の想定よりも版行が重ねられていたことが知られる。改訂には、東洋大学附属図書館稲葉文庫の所蔵資料「田蓑の日記の中に改むべきところ、」（伝・衣川長秋自筆）の影響がみられる。

一、先行研究と問題の所在

一―一、衣川長秋

衣川長秋（きぬがわ・ながあき、一七六六明和三年―一八二三文政六年）は、近世後期の国学者である。山本（一九五八）、山根（一九八八）などに拠れば、伊勢国一志郡須川の人で本姓は池田、本居宣長の同族という。一七九一寛政三年頃に上京。『訂正古訓古事記』（一八〇三享和三年刊）の出版に際しては、京都の書肆、汲古堂・河南儀兵衛との交渉に携わった。一八〇〇寛政十二年に鳥取へ下向。一八〇三享和三年に藩より正式な滞留を認められた。門弟三百人と称され、鳥取藩国学の祖といわれる人物である。『金槐集解』（散佚）、『百人一首峯梯』（一八〇六文化三年刊）、『新古今集渚乃玉』（写本）、『倭読要領辨』（写本）など和歌集や語学書の註釈の

ほか、『田蓑の日記』（二八二二文政五年刊）、『やつれ蓑の日記』（二八二三文政六年刊）などの紀行文を著した。紀行文の出版や『大同類聚方』の異本校合が目的での京都滞在中に発病し、大阪の門人・中島豊足宅にて、文政六年二月十日巳上刻に没したという。享年五十八。^①

『訂正古訓古事記』に関しては、安藤（一九三〇）、皇典講究所（一九三〇）に詳しい。また、川村（一九九二）や秋山（二〇〇〇）によれば、『百人一首峯梯』は、英国の日本学研究者フレデリック・V・ディッキンズ（一八三八―一九一五）による百人一首の翻訳（一八六六慶応二年）の底本に使われた。西洋人による日本文学の翻訳としては最初期の事例である。

一、二、先行研究

『田蓑の日記』については、石破（二〇〇六）に
：調査した諸本はいずれも文政五年の版本のみである。思うに文政五年版本を初版本として少数刷ったのみで終わり、再刷はせられなかったであろう。（二二六頁、九一一行）
とあるが、後述するとおり改刻版本と改刻版後印本が存在する。

『やつれ蓑の日記』について岡野（二〇〇九）が先行する津本（二〇〇七）の翻刻をとりあげ、

衣川長秋の紀行文版本の分類について

本書については、津本（二〇〇七）において翻刻本文が公にされているが、不審な箇所（誤脱か）がまま見られる。同書では九曜文庫蔵の版本（文政四年序文）を底本とするが、解題によるかぎり、鳥取県立図書館蔵本と同一本文をもつ版本と見なして差し支えないようである。そのため、今回改めて原本を検し、翻刻することとした。（五九頁、上段六一〇行）

と述べている。実際に岡野（二〇〇九）は、津本（二〇〇七）の誤りと見られる箇所修正を加えた翻刻本文を提示している。ただし結果として、岡野（二〇〇九）は改刻版本の本文を示しているため、初版本である津本（二〇〇七）の底本（九曜文庫本）の実態とは僅かながら異なっている。^② また、改刻版本に見られる附録「雨瀧記行」「美徳山記行」の順序の入れ替え（もしくは綴じ誤り）についても、落丁の疑いを述べるに留まっている。^③

本稿では、衣川長秋の紀行文『田蓑の日記』『やつれ蓑の日記』伝本の諸本分類について整理し、改訂箇所の確認と影響を与えた目される「田蓑の日記」中に改むべきところ、との対応について報告する。

一、二、『田蓑の日記』について

『田蓑の日記』は、衣川長秋が出雲に千家俊信を訪ねた際の旅に

取材した紀行文である。一八一八文政元年の七月二十七日に鳥取を発ち、出雲大社参詣を済ませ、九月九日に帰宅するまでの事柄が描かれている。国本道男による序から一八二二文政四年には成立していたものと考えられ、一八二二文政五年に出版されたことが刊記により知られる。宗政・若林（一九六五）に収められた京都書林仲間
の記録である『板行御赦免書目』（京都大学付属中央図書館 D1111キ12）附図）文政五年の和書之部（本文七十八丁裏）に

一、心学道しるへ 未刻 作者／知常 式冊

一、田簀日記 未刻 作者／長秋 壹冊

一、やつれみの日記 未刻 作者／長秋 壹冊

一、洛水帖 未刻 筆者／千陰 壹冊

として記録がみられる（ただし宗政・若林（一九六五）六八頁では「田裏」と誤植）。この時点で『田裏の日記』が版木に彫られていたことと『やつれみの日記』が未刻であったことが知られる。翻刻としては、石破（一九九六）があり、石破（二〇〇六）では影印と翻刻が対照できる。また、日記中の登場人物に関しては、永見（一九八）（一九九九）（二〇〇〇）の一連の研究がある。

二一、諸本

『国書総目録』記載の所蔵は、

国会図書館、九州大学、京都大学、京都府立総合資料館、無窮会神習文庫、
無窮会織田文庫、旧三井文庫、〔補遺〕教大

以上の八本である。今般、国文学研究資料館の日本古典籍総合目録、日本古典資料調査データベースを参照の上、所蔵が確認された刊本は、以下の二十五本である。

一、国立国会図書館（102-14マイクロフィルム YD-古-3869 参照）改刻版。

二、九州大学附属図書館（5491タ113）初版。

三、九州大学附属図書館（5491タ13B）改刻版後印。

四、京都大学附属図書館（大惣本、5-85タ2、K）初版。

五、京都府立総合資料館（和193223）初版。

六、無窮会神習文庫（6994）初版。

七、無窮会織田文庫（4129）初版。

八、カリフォルニア大学バークレイ校東アジア図書館三井文庫。

（3-4-302、Kマイクロフィルム参照）初版。

九、筑波大学附属図書館（ネ308-27マイクロフィルム参照）改刻版。

版。

一〇、北海道学園大学附属図書館北駕文庫

（叢33マイクロフィルム16-128-4参照）改刻版。

一、茨城大学附属図書館菅文庫 (5-1-178 マイクロフィルム参照) 改刻版。

二、新潟大学附属図書館佐野文庫 (31, k=31-66) 改刻版後印。

三、金沢大学附属図書館暁鳥文庫 (A175.9178) 改刻版。

四、津山郷土博物館道家大門文庫 (38-388, k) 改刻版後印。

五、大洲市立図書館矢野玄道文庫 (51-157, k) 初版。

六、豊橋美術博物館森田家文庫 (990-箱番号52, k) 初版。

七、鳥取県立図書館 (950) 二郷土 WH, 110680835) 初版。

八、鳥取県立図書館 (950) 二郷土 WH, 110680850) 初版。

九、鳥取県立図書館 (950) 二郷土 WH, 117477781) 初版。

一〇、鳥取県立博物館田中家文庫 (1972) 初版。

一一、鳥取県立博物館秋田政蔵文庫 (42) a 初版。

一二、鳥取県立博物館秋田政蔵文庫 (42) b 初版。

*同一の請求記号で二冊収められている。便宜上、a、bとして識別を行う。両者とも序一丁表に「秋田氏蔵書」朱印あり。aに僅かに虫損とつかれが見られる。bには「雨桂草根」朱印あり。

一三、鳥取大学付属図書館郷土資料センター (国漢5文学1) 初版。

一四、石破洋氏架蔵本 (甲) ↓石破 (二〇〇六) 参照、初版。

一五、石破洋氏架蔵本 (乙) ↓石破 (二〇〇六) 参照、初版。

二二、書誌的事項

参考) 四、京都大学付属図書館本 (請求記号 85-5, タ-2) の書

誌を記す。

○寸法：縦二五・七種、横一八・二種。○装丁：版本、楮紙、袋

綴、四ツ目綴。○表紙：縹色表紙、原題箋 (刷題箋)、修補の痕

跡あり、再綴。○封面：なし。○外題：「田蓑能日記」。○首題：「田蓑日記」。○柱題：「たみの、日記」。○尾題：「田蓑日記終」。

○構成：序二丁、本文三十九丁、奥附一丁 (本居大平の歌・「やつれ蓑の日記全一冊 / 衣川蔵版」の広告・刊記)、都合四十二丁。

○印記：「長嶋町五丁目 / 大野屋惣八」朱印 (封面)、「購求」明治三二・四・八 / 京大図」朱印 (序一丁表)。○刊記：「文政五年

午九月發行 / 弘所書林 大坂心齋橋安堂寺町南へ入 / 穂田屋太右衛門 / 京三條通寺町西へ入 / 河南儀兵衛」。

二二三、分類

調査結果を踏まえて、諸本を以下の三種に分類する。

① 初版本 (文政五年刊、書肆：河南儀兵衛 / 秋田屋太右衛門、衣川蔵版) 二、四一八、一五二五。

② 改刻版本 (刊年未詳、書肆：河南儀兵衛 / 秋田屋太右衛門、衣川蔵版、封面と刊記のどちらかもしくは両方を欠くものが含まれ

る。再綴とみられる一部を除くほぼ全ての本が、全丁間紙入り。

一、一〇、一一、一三。

③ 改刻六書肆版本（刊年未詳、書肆…菱屋孫兵衛／岡田屋嘉七／河内屋喜兵衛／河内屋茂兵衛／河内屋和助／敦賀屋彦七、附五車楼蔵版略書目）三、一二、一四。

『田蓑の記』版本では、尾題のある本文三十九丁裏の匡郭も識別の目安となる。初版本では、左边上部の「田蓑日記終」の「蓑」の横に欠損が見られる。改刻版本では左辺下部に二箇所欠損が現れ、改刻六書肆版本では上辺左部の欠損が加わる。

三、『やつれ蓑の日記』について

『やつれ蓑の日記』は、前年の出雲詣での折には訪ねる機会のなかった美保神社や大山などへ、米子行きに合わせて参詣した道中の紀行文である。一八一九文政二年の四月十八日に鳥取を発ち、源氏物語の講釈や大同類聚方の校合などしながら参詣を済ませるが、出雲の清水寺へ詣でて米子の門人田代恒親宅へ戻ると、自宅が火災で焼失したという知らせが届き、閏四月二十九日に鳥取へ帰着する。

先述の通り、翻刻は津本（二〇〇七）と岡野（二〇〇九）がある。本文にふくまれる上代語について取り上げた岡野（二〇一一）、また岡野（二〇一三）により註解の試みが始まっており研究の進展が

期待される。

三一、諸本

『国書総目録』記載に知られる所蔵は、

【文政六年版】静嘉堂文庫、広島大学、龍谷大学、高木文庫、

旧三井本居。

【刊年不明】国会図書館、静嘉堂文庫、宮内庁書陵部、大阪市立大学、大阪府石崎、桜山、無窮会織田文庫、無窮会神習文庫。

以上の十三本である。

今般、所蔵が確認された刊本は、以下の三十一本である。

【文政六年版】

- 一、静嘉堂文庫本（21502, 515 函8架）初版。
- 二、広島大学付属図書館（大倫 252）初版。
- 三、龍谷大学附属図書館（914.6:40-W, 資料番号 20150064170）初版。
- 四、天理大学附属図書館高木文庫（291.51509）初版。
- 五、カリフォルニア大学バークレイ校旧三井文庫（3-4-284, マイクロ参照）初版。
- 六、豊橋美術博物館森田家文庫（1018, 箱番号 32）初版。

七、早稲田大学図書館九曜文庫（文庫 30E0067）初版。URL から参照可能

(http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/bunko30/bunko30_e0067/bunko30_e0067.pdf) 2014.12.05 現在。

八、鳥取県立図書館（w950199）栗谿⁷ 117617989）初版。

九、鳥取県立博物館田中家文庫（1973）初版。

一〇、鳥取県立博物館秋田政蔵文庫（43）初版。

【刊年不明】

一一、国立国会図書館（241-118）改刻版。

一二、国立国会図書館（915.5|k25|y|w）改刻版後印。

一三、静嘉堂文庫（15402.82 函 65 架）改刻版。

一四、宮内庁書陵部本（黒 191）改刻版。

一五、九州大学付属図書館（549|ヤ15）改刻版。

一六、筑波大学附属図書館本（ル 170-111. 10076721461 マイクロフィルム参照）改刻版。

一七、新潟大学佐野文庫本（31-67-1止）改刻版。

一八、奈良女子大学附属図書館（K61/125. 1558A1-0002）改刻版。

以下の URL から参照可能 (<http://www.lib.nara-wu.ac.jp/nwugdb/k008/>) 2014.12.05 現在。

一九、大阪府立中之島図書館石崎文庫（223.517）改刻版。

二〇、鳥取県立図書館（95014 郷土 WH. 110680918）改刻版。

二一、鳥取県立図書館（95014 郷土 WH. 110680926）改刻版。

二二、大阪市立大学本（915.5KIN）改刻版。

二三、会津若松市立会津図書館本（911.1k）改刻版。

二四、都城市図書館（91）改刻版。

二五、米子市立図書館（111024048|002|031）改刻版後印。

二六、昭和女子大学附属図書館桜山文庫本（桜 915.5/23）改版。

二七、関西大学付属図書館（124|16-31）改刻版。

二八、初瀬川文庫本（8-406M マイクロフィルム参照）改刻版。

二九、無窮会織田文庫（織田文庫 4263）改刻版。

三〇、大阪天満宮御文庫（國拾五、参六参號・99-9. 1/1）改刻版後印。

三一、堺市立中央図書館（0473.1.k）改刻版後印。

三二、書誌的事項

参考に二、広島大学付属図書館本（大倫 252）の書誌を記す。

○寸法：縦二五・六糎、横一八・二糎。○装丁：版本、栞紙、袋綴、四ツ目綴。○表紙：浅葱色表紙（布目地空押）、原題箋（刷題箋）、再綴。○封面：なし。○外題：「耶都礼蓑能日記」。○首題：「や都礼蓑乃日記」。○柱題：やつ連みの日記。○尾題：

「や都連美能、日記終」。○附録：「附録／雨瀧記行」「雨瀧記行終」「美徳山記行」「美徳山記行終／附録終」。○構成：序二丁、「やつれ蓑」十四丁、附録十三丁、「雨瀧」六丁、「美徳山」七丁表、「奥附（美徳山）七丁裏」此二記行もこたびついでにしりにつけてゑらせつ／秀雄」／衣川蔵版」の広告・刊記）都合二十九丁

○印記：「廣島文理科大学図書之印」朱印（序二丁表）、「大倫」朱印（序一丁表）○刊記：「文政六年未正月發行／弘所書林 京三條通寺町西へ入／河南儀兵衛」

三二二、分類

- ① 初版本（文政六年刊、書肆：河南儀兵衛、飯田秀雄跋、衣川蔵版）一一〇。
- ② 改刻七書肆版本（刊年未詳、書肆：須原屋茂兵衛／山城屋佐兵衛／岡田屋嘉七／英大助／須原屋伊八／堺屋新兵衛／堺屋定七、入木改刻あり、附録の順番が逆転、「美徳山」最終丁欠落、跋・衣川蔵版なし、ほぼすべての本で全丁間紙入）一一、一三二四、二六二九。
- ③ 改刻版後印本（刊年未詳、書肆：正寶堂・丁子屋源次郎／耕文堂・同出店、入木改刻あり、附録の順番が逆転、「美徳山」最終丁欠落、書目あり、間紙無し、題箋で変体仮名「礼」と「能」の

混同が起きており、「也都能美能乃、日記 全」となっている）

一一、一五、三〇、三一。

『やつれ蓑の日記』改刻七書肆版本では全丁間紙入りのものが多い。これは、印刷された丁の裏にもう一枚楮紙を重ねて綴じた二重丁とで云うべき形式になっており、間紙のない初版本や改刻版後印本と比較して、本に二倍程度の厚みを持たせている。二重ではないがやはり全丁間紙入りの伝本が多い『田蓑の日記』改刻版本と併せて、衣川長秋の紀行文の改訂版は、意図的に間紙入りの拵えで出版されたようにもみえる。

また、『やつれ蓑の日記』改刻七書肆版本と後印本では附録の「雨瀧記行」「美徳山記行」の順番が入れ替わり、「美徳山記行」↓「雨瀧記行」の順に綴じられており、「美徳山記行終／附録終」という附録の尾題と初版の奥附部分が削除された形になっている。

四、改訂部分の対照

先述の通り、『田蓑の日記』『やつれ蓑の日記』では、初版本と入木をした改刻版本が見られる。以下、初版本と改刻版本とを対照して改訂箇所を示し、校正指示と考えられる「田蓑の日記」中に改むべきところ、の対応箇所を添える。

四一、伝衣川長秋自筆「田蓑の日記」の中に改むべきところ、

東洋大学附属図書館稲葉文庫は山本嘉将氏の旧蔵書の一部が収められた文庫であり、鳥取の近世歌壇関連の資料を多く含む。その中に、衣川長秋の自筆とされる紀行文への校正指示が伝わる。底本「田蓑の日記」の中に改むべきところ、(東洋大学附属図書館稲葉文庫白山図書館 2F 書庫、請求記号「YY911.17: Y-8: 4-11: 16 資料番号 2102267214」)については、拙稿(二〇一〇)の翻刻による。

四二、本文対照

改訂箇所を挙げ、初版本(初)と改刻版本(改)の本文を示す。

その後に「田蓑の日記」の中に改むべきところ、(「の対応箇所(衣)を附す。訂正箇所を示す本文の後に括弧【】を挿入し、現行の『田蓑の日記』『やつれ蓑の日記』翻刻本文である石破(1996)津本(2007)岡野(2009)での対応箇所を示す。

(例) 九丁裏五行【石破 p.38. 1.5】

尚、改訂に関係がある場合を除いて、振り仮名は省略する。傍線はすべて稿者によるものである。

『田蓑の日記』

イ、九丁裏五行【石破 p.38. 1.5】

(初) 田代何某がもとに消息し ↓ (改) 田代何某がもとに消息す

(衣) ○田代何某がもとに消息^{云々}／角の中のし文字すに可改

ロ、九丁裏九行【石破 p.38. 1.9】

(初) あやうげなしとて ↓ (改) あやふげなしとて

(衣) ○あや^うげなし^{云々}／う文字ふに改むべし

ハ、十丁裏七行【石破 p.40. 1.7】

(初) たぐなわの千尋なわ ↓ (改) たぐなわの千尋なわ

(衣) ○たぐなわの千尋なわ^{云々}／二ツのわもじはに可改

ニ、十丁裏八行【石破 p.40. 1.8】

(初) さき竹のとを、に ↓ (改) さき竹のとを、に

(衣) ○さき竹のとを、に^{云々}／とを、にとすべし

ホ、十五丁表五行【石破 p.49. 1.5】

(初) 神をづる人にて ↓ (改) 神おづる人にて

(衣) ○神を^{づる}人にて^{云々} おに可改

ヘ、十七丁裏二行【石破 p.54. 1.2】

(初) きさが 姫命を ↓ (改) きさがひ姫命を

(衣) ○きさが 姫^{云々}／きさがひ姫とひ文字を可補

ト、二十二丁裏八行【石破 p.62, 1.8】

(初) 掃木卷よるときははじめ → (改) 帚木卷よるときははじめ
に

(衣) ○掃木卷云々 帚に可改

チ、二十二丁裏八行【石破 p.64, 1.8】

(初) 伯耆國相見縣 → (改) 伯耆國相見縣

(衣) ○伯耆國云々 耆に可改

リ、二十三丁表五行【石破 p.65, 1.5】

(初) 満並豆(ミチナラベテ) → (改) 満並豆(ミチナラベテ)
テ

(衣) ○満並豆(ミチナラベテ)云々 片仮字をテに可改

ヌ、二十三丁表八行【石破 p.65, 1.8】

(初) 幸波閉(サキハハへ) → (改) 幸波閉(サキハハへ)

(衣) ○幸波(サキハハへ)ハ文字のぞくべし

ル、二十三丁裏二行【石破 p.66, 1.2】

(初) 因幡伯耆二國 → (改) 因幡伯耆二國

(衣) ○因幡伯耆云々 耆に可改

ヲ、二十三丁裏六行【石破 p.66, 1.6】

(初) 集侍留(ウゴマリハムベル) → (改) 集侍留(ウゴマナハレベル)

(衣) ○集侍留(ウゴマリハムベル)云々 集侍留(ウゴナハ

レル)片仮字／かく改むべし

ワ、二十六丁表四行【石破 p.71, 1.4】

(初) 浦の夕ばへ → (改) 浦の夕ばえ

(衣) ○浦の夕ばへえに可改

カ、二十七丁表六行【石破 p.73, 1.6】

(初) 御祖の神の生(アレ)まし、 → (改) 御祖の神の生

()まし、

(衣) ○御祖の神の生(アレ)まし、云々／アレの片仮字のぞくべし

ヨ、二十八丁裏七行【石破 p.76, 1.7】

(初) 中村伯耆守の家臣 → (改) 中村伯耆守の家臣

(衣) ○中村伯耆守云々 耆に可改

タ、三十三丁裏十行【石破 p.86, 1.10】

(初) 出雲と伯耆の境なり → (改) 出雲と伯耆の境なり

(衣) ○出雲と伯耆の云々 耆に可改

レ、三十五丁表二行【石破 p.89, 1.2】

(初) 伯耆國と出雲國の → (改) 伯耆國と出雲國の

(衣) ○伯耆國と云々 耆に可改

ソ、三十五丁表三行【石破 p.89, 1.3】

(初) 伯耆国と見たし ↓ 伯耆国と見たし

(衣) ○伯耆国と見たし云々 耆に可改

ツ、三十五丁表四行【石破 p. 89, 1. 4】

(初) なからは伯耆国なれば ↓ (改) なからは伯耆国なれば

(衣) ○伯耆国なれば云々 耆に可改

ネ、三十五丁表七行【石破 p. 89, 1. 7】

(初) 伯耆国の山に ↓ (改) 伯耆国の山に

(衣) ○伯耆国の山に云々 耆に可改

ナ、三十六丁表五行【石破 p. 91, 1. 5】

(初) むかし大原康綱実盛 ↓ (改) むかし大原安綱真守

(衣) ○大原康綱実盛云々 / 厩ハ安に実盛ハ真守に可改

ラ、三十八丁表六行【石破 p. 95, 1. 6】

(初) 木花咲屋 命をまつれり ↓ (改) 木花咲屋姫命をまつ

れり

(衣) ○木花咲屋 命 姫の字を可補

『やつれ蓑の日記』

ム、「やつれ蓑の日記」序一丁表七行【津本 p. 375, 1. 3、岡野 p. 63、

上段 1. 15】

(初) 伯耆の大神山など ↓ (改) 伯耆の大神山など

(衣) ○伯耆の云々 耆に可改

ウ、「やつれ蓑の日記」四丁表七行【津本 p. 377, 1. 18、岡野 p. 64、

下段 1. 16】

(初) 名にあふ大山 ↓ (改) 名におふ大山

(衣) ○名にあふ云々 おに可改附録 / 美徳山記の中に

キ、「やつれ蓑の日記」十一丁表二行【津本 p. 383, 1. 4、岡野 p. 67、

上段 1. 22】

(初) 佐尾さきつかふる ↓ (改) 佐尾さきつかふ

(衣) ○佐尾さきつかふる 文字のぞくべし

ノ、「美徳山記行」一丁裏二行【津本 p. 380, 1. 9、岡野 p. 70、下段 1.

7】

(初) 大原実盛がおりし所 ↓ (改) 大原真守本行がおりし所

(衣) ○大原実盛云々 真守に可改

四一三、考察

初版本と改刻版本を比較すると、『田蓑の日記』での改訂が二十

二箇所、『やつれ蓑の日記』での改訂が四箇所である。この合計二

十六箇所の改訂箇所が、『田蓑の日記』の中に改むべきところ、

(衣) の指摘箇所とすべて一致する。但し、『田蓑の日記』改刻版本

に見られる次の二箇所では、修正案との齟齬がみられる。

① ハ、「田蓑の日記」十丁裏七行（初）たぐなわの千尋なわ ↓
 （改）たぐなわの千尋なわ、（衣）○たぐなわの千尋なわ云々／二
 ツのわもじはに可改

② ヲ、「田蓑の日記」二十三丁裏六行（初）集侍留（ウゴマリハムベル） ↓（改）集侍留（ウゴマナハレベル）、（衣）○集侍留（ウゴマリハムベル）云々 集侍留（ウゴナハレレル）片仮字／かく改むべし

また、次の箇所では、修正案の通りに漢字が改められているが、その際に指示には無い振り仮名が施されている。

③ ノ、「美德山記行」一丁裏二行（初）大原実盛（改）大原真守がおりし所（衣）○大原実盛云々 真守に可改
 二十六箇所の校正指示のほぼ全てが改刻版本に反映されている処から、「田蓑の日記」中に改むべきところ、ゝ」は、実際に改訂に影響を与えた資料であると考えられる。

また、改刻版本が、指示内容と異なる修正内容を含むことから、「田蓑の日記」中に改むべきところ、ゝ」が初版本と改刻版本との異同箇所を抽出して編まれた偽書である可能性も低い。

おわりに

以上、衣川長秋の紀行文『田蓑の日記』と『やつれ蓑の日記』に

ついて、諸本分類と本文異同を確認し、「田蓑の日記」中に改むべきところ、ゝ」との対応状況を報告した。

本稿の趣旨は、以下の二点である。

① 衣川長秋の紀行文『田蓑の日記』および『やつれ蓑の日記』の版本は、それぞれ三種類に分類が可能である。初版のほかに改刻版本とその後印本が存在することから、従来の想定よりも多く、また長い期間にわたって流布したことが考えられる。

② 稲葉文庫資料「田蓑の日記」中に改むべきところ、ゝ」は、両紀行文の改訂に影響を与えた資料である可能性が高い。

現在、本稿で改刻版本と改刻後印本に分類した『田蓑の日記』と『やつれ蓑の日記』の伝本の成立年は、それぞれの序文により文政四年とされることが多い。しかしながら、初版の刊行年とそれ以後に入木改刻が施されたことを考慮すれば、『田蓑の日記』改刻版本は早くても文政五年以降の成立であり、『やつれ蓑の日記』改刻版本の成立は文政六年以降である。校正指示と見做される「田蓑の日記」中に改むべきところ、ゝ」に従っていることを勘案すれば、両者共に『やつれ蓑の日記』が刊行された一八二三文政六年一月以降と考えるのが妥当であろう。衣川長秋の命終が文政六年二月十日であることを思えば、自筆資料の場合には「田蓑の日記」中に改むべきところ、ゝ」は衣川長秋最晩年の著述ということになる。

改刻版後印本の刊年についても未詳とせざるを得ない。ただし巻末の書目を手掛かりに刊年の下限を推定するならば、『田蓑の日記』では一八三九年以降、『やつれ蓑の日記』では一八五三嘉永六年以降と一応考えて置くことはできそうである。後考を待ちたい。

注

① 衣川長秋の没年の確定根拠に就いては、拙稿(二〇二二)(二〇二三)を参照。

② 『源氏物語』の研究者としてまた蒐書家として著名な中野幸一氏は二〇〇七平成一九年に逝去されており、その蔵書の一部が、九曜文庫の名を残して早稲田大学図書館に収められたのは二〇一〇平成二二年のことである。岡野(二〇〇九)の時点では、津本(二〇〇七)の底本参照が困難であったと推察される。

③ 岡野(二〇〇九)には、

本書の刊行時期であるが、版本・写本ともに刊年が明記されていない。版本(甲)(乙)ともに、最終丁に落丁があるのかもしれない。(岡野(二〇〇九)・六〇頁下段三四行)

とあり、鳥取県立図書館所蔵の版本(甲)と版本(乙)および写本の書誌を掲出し、版本(甲)を翻刻の底本としている。版本(甲)は本稿『やつれ蓑の日記』分類番号の二〇、版本(乙)は二一にあたる伝本とともに改刻版本である。版本(甲)は、一度紙綴りを解いた上で間紙を除き、附録を初版本に倣い「雨瀧記行」↓「美德山記行」の順序に戻した上で墨書補写を施した経緯が推察される。

衣川長秋の紀行文版本の分類について

④ 『田蓑の日記』改刻版後印本については、附録の「皇都書肆五車樓蔵版畧書目」京御幸町御池下ル「菱屋孫兵衛」中に「同(※稿者註・十八史畧) 天保再板松苗岩垣先生標記 七冊」がみえており、これを『立齋先生標題解註音釋十八史畧』(京都)菱屋孫兵衛版/天保一〇年/七卷七冊)と推定した場合、『やつれ蓑の日記』改刻版後印本については、同じく巻末広告にみえる『魚類精進四季献立/会席料理秘叢抄』丁字屋源次郎版の刊年「嘉永六年丑秋」と跋にみられる「偏者六十七翁/池田東齋主人」による。

参考文献

秋山勇造(二〇〇〇)『日本学者フレデリック・V・デイキンズ』神奈川

大学評論ブックレット八。

安藤正次(一九三〇)訂正古訓古事記の校刻について。『国學院雑誌』第

三六卷五号、五〇―五九頁。

石破 洋(一九九六)〈翻〉衣川長秋『田蓑の日記』——翻刻と研究(上)。

『高根国語国文』第七号、一五―一四頁。

——(二〇〇六)『鳥取藩国学者衣川長秋『田蓑の日記』影印・翻刻と研究』(私家版)。

岡野幸夫(二〇〇九)鳥取県立図書館蔵『やつれ蓑の日記』解題・翻刻。

『鳥取短期大学研究紀要』第六〇号、p. 五九七―二頁。

——(二〇一〇)衣川長秋『やつれ蓑の日記』に見られる上代語。

『北東アジア文化研究』三四号、六九―八四頁。

——(二〇一三)『やつれ蓑の日記』訳注(二)『鳥取短期大学研究紀

要』第六七号、一―一頁。

家臣人名事典編纂委員会(一九八八)『三百藩家臣人名事典』第五卷、新

人物往来社。

衣川長秋の紀行文版本の分類について

六四

川村ハツエ（一九九二）『Dickensの英訳「百人一首」』、『英学史研究』第二

四号、一五—三二頁。

↓（一九九七）『F・V・ディキンズ——日本文学英訳の先駆者——』
二〇—四九頁所収。

皇典講究所（一九三〇）本居宣長大人の書翰に就いて。『国學院雜誌』三

六卷九号、七五—七八頁。

津本信博（二〇〇七）やつれ蓑の日記——附録雨瀧紀行・美德山紀行——。

『江戸後期紀行文文学全集』第一巻、三七五—三九四頁、六七七—六七八
頁。

永見邦子（一九九八）『田篁の日記』における登場人物——その一——。

『島根国語国文』第九号、七五—八五頁。

——（一九九九）『田篁の日記』における登場人物——その二——。

『島根国語国文』第一〇号、七九—八五頁。

——（二〇〇〇）『田篁の日記』における登場人物——その三——。

『島根国語国文』第一一号、四三—五二頁。

丸山健一郎（二〇一〇）〈資料紹介〉「田篁の日記の中に改むべきところ、」翻刻。『同志社国文学』第七三号、一〇六—一〇二頁。

——（二〇二二）文化二年写、衣川長秋記事について。『同志社国文学』第七七号、九七—一〇八頁。

——（二〇二三）文政六年、衣川長秋死亡記事——村田春門『田鶴舎
日次記』第三冊より——。『同志社国文学』第七九号、一一六—一二
一頁。

宗政五十緒・若林正治（一九六五）『近世京都出版資料』日本古書通信社。

山根幸恵（一九八八）衣川長秋。家臣人名事典編纂委員会（一九八八）、

三三六—三七七頁。

山本嘉将（一九五八）『近世和歌史論』文教図書出版株式会社↓（一九九

二）修正復刻版。バルトス社。

〔附記〕本稿は、第二十八回鈴屋学会大会研究発表会（西暦二〇一一平成二十三年四月十七日、於本居宣長記念館二階講座室）における口頭発表「衣川長秋の紀行文の改訂について」に基づくものである。研究発表の席上、先輩諸賢からはご教示と激励を賜った。また、研究をすすめるにあたり、石破洋先生からはご高著のご惠投にあずかった。ここに記し、深甚の謝意を呈する。